

## 令和7年度川口賞報告書

報告者：森井 椋太（東京大学・大学院農学生命科学研究科）

参加学会：British Ecological Society Annual Meeting 2025

開催地：Edinburgh, United Kingdom

日程：2025年12月15日～12月18日

発表数：口頭発表 857 件、ポスター発表 727 件、参加者 1744 名

### 参加報告

私は、British Ecological Society Annual Meeting 2025（イギリス生態学会）に参加しました。イギリス生態学会は、世界で最初に設立された歴史ある生態学会であり、現在では120か国以上の研究者が所属しています。私はこれまでヨーロッパを訪れたことはなく、イギリス生態学会に参加するのは今回が初めてでした。

本学会では「Sexual selection drives a latitudinal gradient: Evolutionary change in the reproductive trait of males due to male-biased operational sex ratio in *Hynobius nigrescens*」という演題でポスター発表を行いました。本発表では、博士課程までに得られた研究成果として、クロサンショウウオにおいて低緯度地域ほど実効性比（ある時間断面における繁殖可能な雌雄の比）が雄に偏ることで雄同士の争いが強く、それによって繁殖に関わる形質（頭胴長）が雄でのみ長くなる方向に進化した、という内容を発表しました。ポスター発表のコアタイムには、イギリスやアメリカをはじめとする多くの研究者の方々が発表を聞きに来てくださり、活発な議論を行うことができました。発表後には、「Cool!」、「先行研究とは異なるパターンがみられたのが興味深い」、「今後は、どのような研究を進めていくのか」といった多くの感想や質問をいただき、今後の研究に対するモチベーションが一層高まりました。また、コアタイム以外の時間にもアメリカの両生類の研究者の方と交流する機会があり、今後アメリカを訪れる際には、ぜひ連絡してほしいとのお言葉もいただきました。このように、今回の学会参加を通じて、今後の共同研究や海外での研究活動につながる研究者同士の関係を築くこともできました。

本学会では、ポスター発表に加えて、多くの口頭発表も行われており、幅広い分野の発表が行われていました。中でも、外来種防除や絶滅危惧種の分布適地の推定など、保全や管理に直結する応用研究が多い点が印象的でした。日本の生態学分野の学会では、生物の基礎生態を明らかにする研究が多い印象がありますが、本学会では応用研究が盛んであり、日本との研究のトレンドの違いを実感しました。

今年度の川口賞を受賞したことにより、イギリス生態学会においてオンサイトで発表するという貴重な機会をいただきました。イギリスは非常に物価が高く、交通費、参加費、宿泊費、食費など多額の費用を要するため、今回の受賞がなければ本学会へのオンサイトでの参加は極めて困難であったと思います。故 川口四郎先生、ならびに日本動物学会関係者の皆様に心より感謝申し上げます。